チャイルドサイエンス, 2020, 20, 34-39

投稿

● 研究論文

高校の設置者を選択する要因
―教育アスピレーションと母親の関与の視点から―

西丸良一（明星大学人文学部人間社会学科）

要約

本稿は、高校の設置者選択を規定する要因を検討した。分析の結果、私立高校が高い学力的位置にある地域は、高卒後の進路に有利だという理由で、子どもは私立高校を選択する。ただ、私立高校が低い学力的位置にある地域でも、高卒後の進路に有利だという理由で、子どもは私立高校を選択していた。学力的位置づけに関係なく、公立より私立高校を選択する子どもは、高い教育アスピレーションを持っている。

一方、私立高校が低い学力的位置にある地域の場合、教師に子どもの学力などの相談をする母親の子どもほど、私立高校を選択する。また、そうした地域は、学力が高い子どもほど、公立高校を選択している。子どもの学力が低いことを教師と相談し、私立高校を適切な進路だと母親は考え、子どもに選択させているのかもしれない。地域における私立高校の位置づけの違いは、こうした点で、設置者を選択する規定要因の違いとなっている。

だが、学校教育費は私立高校の方で高いため、いずれの地域でも、高い出身階層の子どもに私立高校は選ばれる傾向にある。私立高校は高い出身階層の、高い教育アスピレーションを持った子どもに選択されるといえそうだ。

キーワード：教育アスピレーション、出身階層、学力、母親の関与、教師との相談

1．問題の所在

本稿は、高校の設置者に注目した学校選択の規定要因を探る。日本における学校選択の研究は、義務教育段階の設置者選択に焦点が置かれ、親の志向に注目している。西村（2006）は、学校選択の自由が狭い、または公立における教育が画一的であると考える親ほど、私立中学へ子どもを通わせることを示唆する。片岡（2009）も親の志向に注目し、子どもに小・中学校を受験させたい親がそうでない親よりも、子どもの教育的リスクを回避するため、受験させる傾向にあること明らかにする。また、価値観の合わない異質な他者（親）との交流を望まず、集団的同質性を志向する傾向にあることも示した。

このように、親の志向に焦点が置かれる理由は、学校の設置者選択が小・中学校へ就学する前の子ども自身に判断できない（藤田 1997: 85）からだといえる。また、そうした志向は出身階層と密接に関係し、子どもの学校選択に影響をおよぼしている（Yang 2004; 片岡 2009）。事実、私立小・中学校は、高い学校教育費を必要とするため、私立を受験する子ども、または在学する子どもの出身階層は、公立のそれより高い（濱本 2015）。こうした先行研究を踏まえると、義務教育段階における学校の設置者選択に、親の志向と出身階層がどのように関連しているかを、これまでの研究は明らかにしてきたといえる。

その一方、高校段階の設置者選択に焦点を置いた研究はあまりみあたらない。高校選択は入試のしくみ、または学力や学科を基準としたその序列構造からわかるとおり、生徒本人の学力に大きく規定されている[1)]。そのため、高校選択時に親の志向が、直接的に影響する余地は少ないことが想定できる。また、高校選択が生徒の学力で規定されているならば、親の志向は、すでに学力に吸収されているとも考えられる。こうした背景から、高校の設置者選択に焦点を置いた検討は、あまりなされてこなかったのであろう。

もちろん、高校の設置者に焦点を置いた検討が、まったくなされていないわけではない。以前から全国平均的に、私立高校へ進学する生徒は、公立高校へ進学する生徒より低い学力にあり、私立高校は公立高校を補完する位置づけ（香川ほか 2014）とされてきた。そのため、学力を基準とした序列構造にしたがえば、公立高校より私立高校の方が低い位置にあると考えられる。しかし、図１のとおり、高校の設置者別に卒業後の高等教育進学率をみると、公立高校より私立高校の方が高い進学率を示し、その差は近年、大きくなっている。つまり、学力序列に沿うような教育達成が、高校の設置者でみる限り、生じていないのである。こうした現象に対し、西丸（2014）は、公立高校の生徒より低い学力でも、出身階層の高さによって、私立高校の生徒は高等教育へ進学する傾向にあることを示す。学力の低さを出身階層で補い、高等教育へ進学する生

徒の経由先として、私立高校が存在してきたことを明らかにしたのである。

低い学力にもかかわらず、高い出身階層によって高等教育への進学を果たす子どもに、私立高校が選択されているならば、義務教育段階以上に、高校の設置者選択は複雑なメカニズムになっていることが考えられる。なぜなら、義務教育段階で私立を選択する子どもは、公立を選択する子どもより、高い出身階層の親が教育に強い関心をもち、子どもの高い教育達成につなげようとする。その一方で、高校段階で私立を選択する子どもは、出身階層は高いが、学力は低い。にもかかわらず、公立高校を選択した子どもよりも、高い教育達成を成そうとしていると考えられるからである。

2．検討の視点

先述したとおり、本稿の目的は、高校段階における設置者の選択要因を探ることである。ただし、義務教育段階のように、高校の設置者は親の志向だけで強く規定されているとは考えにくい。また、高校の設置者選択は複雑なメカニズムになっている可能性が想定される。そこで本稿は、希望する高校の設置者に対し、『子どもが高校を選ぶ理由』と『子どもに対する母親の関与』がどのような影響をおよぼすかに注目する。

『子どもが高校を選ぶ理由』は、「家の近くにある学校」「他校より優秀な学校」「卒業後の進学に有利」の３つであり、高校を選ぶ際、それぞれを重視するか否かとした変数で用いる。「家の近くにある学校」は、高校の通学状況を示している。公立高校はその学校数からもわかるとおり、全国的に万遍なく設置されているが、私立高校は設置に地域差があり、大都市圏に集中している[2)]。全国平均的に、公立より私立高校へ通う方が、長い通学時間を必要とすることが推測される[3)]。もちろん、大都市圏ほど私立高校が設置される傾向にあるならば、同じ私立高校へ通学するとしても、大都市圏ほど通学時間は短いことが考えられる。そうした点から、「家の近くにある学校」という高校を選ぶ理由は、居住地域の都市規模の情報も含んだものといえよう。

「他校より優秀な学校」と「卒業後の進学に有利」は、高校選択において、重要な要因となる。「他校より優秀な学校」は、学校の評判や先生の質（Goldring et el. 2008）という情報をあらわす部分もあるが、教育意識をあらわしているとも考えられる。先に述べたとおり、学力をもとにした序列構造を前提におこなわれる日本の高校選択において、「他校より優秀な学校」は、おおむね生徒の学力的な優秀さを示すといえる。また、「卒業後の進学に有利」は、高校卒業後の進学意識をあらわす。

これら変数は『子どもが高校を選ぶ理由』であるが、こうした子ども本人の志向は、母親の志向とほぼ一致する傾向にある。中澤（2015）は、高２の子どもが抱く進路意識は、その母親の抱くそれとほぼ一致することを示す。つまり、本稿で用いる『子どもが高校を選ぶ理由』は子どもだけでなく、母親の抱く高校選択の理由としてもとらえることができ、教育に対する親子の志向をあらわしているともいえる[4)]。

本稿で用いる『子どもの教育に対する母親の関与』は、「学校行事・PTA・学校ボランティアへの参加」[5)]「教師に子どもの学力などの相談」[6)]する頻度である。子どもに対する親の関与は、教育と出身階層の関連に、親の関与がどのように媒介しているかを検討するため、用いられてきた（Lareau 1987 など）。近年、日本でも、そうした観点からの検討がなされつつある。Matsuoka（2014）は、社会経済的地位の高い親ほど子どもへの関与が多く、また親の関与と子どもの学力

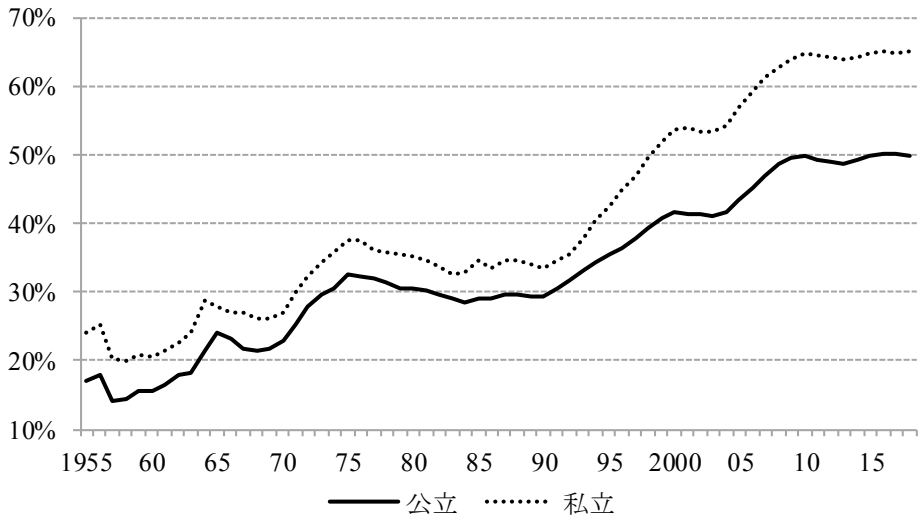

図1：設置者別高等教育進学率（国立を除く）※学校基本調査（各年）より作成

が正の関連を示すことを明らかにしている。竹ノ下ら（2013）の研究は、教育システムの異なる日本と韓国を比較したものであるが、両国とも高い出身階層の親ほど、子どもへ関与する頻度が多く、その頻度の差が学力に影響することを示している[7]。

学校の設置者選択においても、親の関与との関連は検討されている。Goldring ら（2008）は学校プログラムやボランティアへ参加している親ほど、私立校を選択していることを示す。こうした傾向は、日本においてもみられるのであろうか。「学校行事・PTA・学校ボランティアへの参加」の頻度を用い、検討を試みる。

もちろん、こうした母親の関与は、子どもとだけでなく、教師との接触としても捉える必要がある。すでに述べたように、日本の高校選択は、子ども本人の学力を基準におこなわれている。そうした背景を踏まえれば、「教師に子どもの学力などの相談」をする頻度は、高校選択においてわが子に、より良い進路を導くための母親の関与と考えられる。Coleman ら（1987）は、公立校よりカトリック校が高い教育効果を示すのは、各子どもの親同士のつながりによるものであることを示した。高校選択が、子どもの学力で大きく規定される日本において、母親と教師の相談関係は、高校の設置者選択とどのような関連を示すのであろうか[8]。

3．データについて

高校の設置者選択に対し、『子どもが高校を選ぶ理由』と『子どもに対する母親の関与』がどのように規定するかを探るため、本稿で使用するデータは「中学生と母親パネル調査（JLPS-J）」である。この調査は、調査会社のモニターである中学３年生とその母親を対象とし、2015 年 10 月～ 12 月に郵送でおこなった。有効回収は 1854 ペアである（有効回収率 45.0%）。ここで使用するデータの特徴は、全国規模である点が挙げられる。サンプルは調査会社の保有するモニターだが、このモニターは住民基本台帳から無作為抽出された世帯に協力を依頼し、集められている。そのため、従来のサンプリングによって得られた調査データと、分布を比較しても大きく乖離していない（藤原 2016）[9]。

このように収集されたサンプルのなかでも、本研究の分析対象となるのは、公立中学に在籍する子どもとその母親である。国立中学に在籍する子どもは少数であるため、データ上でとらえることが難しい。また、私立中学に在籍する子どもは、おおむね附属高校への進学が決まっており、事実上、高校選択が済んでいる。こうしたことから、国・私立中学に在籍する子どもは、分析から除外した[10]。

分析は、各都道府県における高校の序列構造に、私立高校がどのような位置づけにあるかを考慮しておこなう。周知のとおり、高校は各都道府県で運営されているため、私立高校の位置づけは、各都道府県で大きく異なる（香川ほか 2014）。例えば、私立高校の位置づけが、比較的上位にある地域の場合、卒業後の進学のため、私立高校を選択するといったことは、十分考えられるだろう。そこで、本稿は、全国規模データの特徴を活かし、都道府県ごとに私立高校の平均入試難易度（受験偏差値）を算出し、50 以上となった埼玉・千葉・東京・和歌山・沖縄（N=272、うち私立高校への進学を希望する子ども =48）と、50 未満となったそれ以外の都道府県（N=1207、うち私立高校への進学を希望する子ども =128）にわけて分析をおこなうこととした[11]。

先ほど説明した『子どもが高校を選ぶ理由』と『子どもの教育に対する母親の関与』以外に用いる独立変数は、「子どもの性別」「居住する都市規模」「世帯年収」「母学歴」「中学成績」である。子どもの性別は男を１、女を０、居住する都市規模は区を１、市町村を０としたダミー変数である。世帯年収は過去１年間の所得を示し、450 万円未満を基準とした４分類（450 ～ 650 万円位、650 ～ 950 万円位、950 万円～）で用いる。母学歴は短大卒・大卒を１、高卒・専門卒を０としたダミー変数、子どもの学力をあらわす中学成績は、1：下～５：上の量的変数とした。従属変数は、調査時点である子どもが中３時に、志望している高校の設置者が私立なら１、公立なら０とする。そのため、検討はロジスティック回帰分析の結果でおこなう[12]。

4．分析

まず、私立高校の平均入試難易度が 50 以上の都道府県を分析した表１の左側の分析モデルを検討し、希望する高校の設置者選択の規定要因を探る。子どもが高校を選ぶ理由は、「卒業後の進学に有利」であることを重視するほど、私立高校を選択する傾向にある。私立高校の学力的位置づけが相対的に高いため、将来の教育達成を見据え、私立高校が選択されているのであろう。子どもの教育に対する母親の関与は、高校の設置者との関連を示さない。

中学成績は、統計的に有意な関連を示さない。私立高校の位置づけが相対的に高い地域の場合、本人の学力は設置者間で差がないということである 。階層要因は、世帯年収が 950 万円以上だと、私立高校を選択する傾向にある。学校教育費を考慮した上で、子どもは高校の設置者を希望するようすがうかがえる。

次に、私立高校の平均入試難易度が 50 未満の都道府県を分析した表１の右側の分析モデルを検討する。「家の近くにある学校」は負の関連を示しており、学校が家の近くにあることを重視するほど、公立高校を選択する傾向にある。公立高校は万遍なく設置されているため、こうした傾向が示されたといえる。

先にみた、私立高校の平均入試難易度50以上において、「家の近くにある学校」は統計的に有意な差を示さなかった。埼玉・千葉・東京といった大都市圏の場合、私立高校の設置数が多い。先のモデルには、こうした地域が含まれているため、差が確認できなかったのであろう。

「卒業後の進学に有利」であることを重視するほど、私立高校は選択される傾向にある。私立高校の位置づけがそれほど高くなくとも、高い教育達成を望む子どもは、私立高校への進学を希望している。子どもの教育に対する母親の関与について、「教師に子どもの学力などの相談」は正の関連を示す。相談する頻度が多い母親の子どもほど、私立高校を選択する傾向にあるようだ。

子どもの中学成績に目を転じると、負の関連を示しており、中学成績が高いほど公立高校を選択する傾向にある。私立高校の学力的位置づけが低いと、私立高校は公立高校を補完する立場となっているようすがうかがえる。世帯年収は正の関連を示し、950万円以上だと私立高校を選択する傾向にある。学力的位置づけに関係なく、公立より私立高校は高い学校教育費を必要とする。そのため、世帯年収が高い家庭の子どもほど、私立高校を選択するのであろう[13]。

5．まとめと課題

本稿は、私立高校の学力的位置づけを考慮し、高校の設置者を選択する規定要因を検討した。分析の結果、私立高校が高い学力的位置にある地域は、卒業後の進路に有利だという理由で、子どもは私立高校を選択する傾向にあった。地域における私立高校の位置づけにより、高い教育達成を望む子どもが、私立高校を選択する傾向にあるのだろう。ただ、私立高校が低い学力的位置にある地域でも、卒業後の進路に有利だという理由で、子どもは私立高校を選択することが示された。地域における私立高校の位置づけに関係なく、私立高校を選択する子どもは、公立高校を選択する子どもより、高い教育アスピレーションを持っているといえる。一方で、私立高校が低い学力的位置にある地域の場合、教師に相談する頻度が多い母親の子どもほど、私立高校を選択する傾向にある。また、そうした地域は、子供の学力が高いほど、公立高校を選択している。つまり、こうした傾向は、子どもの学力が低いため、教師と相談し、私立高校を適切な進路だと判断した母親が、子どもに私立高校を選択させているのかもしれない。地域における私立高校の位置づけは、こうした点で、設置者選択を規定する要因の違いをもたらしているといえる。

ただし、地域で私立高校の位置づけが違っていたとしても、学校教育費は私立高校の方で高い。そのため、いずれの地域でも、高校の設置者選択の余地は高い出身階層の子どもにある。つまり、私立高校は高い出身階層の、高い教育アスピレーションを持った子どもに選択される傾向にあるといえる。こうしたことは、学力が低くとも私立高校の生徒の方が高等教育へ進学する傾向を示す図1と整合的である。また、図1のように、私立高校の方が高等教育へ進学する傾向にあるならば、一見、ネガティブにもみえる「教師に子どもの学力などの相談」をする母親の関与は、子どもに高い教育達成を促す要因になりうるといえる。

表1：高校の設置者選択を規定する要因

	私立高校の入試難易度50以上		私立高校の入試難易度50未満	
	B	S.E.	B	S.E.
（定数）	−1.494	.960	−.733	.487
性別（男=1、女=0）	−.084	.337	−.133	.198
都市規模（区=1、市町村=0）	−.181	.376	.148	.237
家の近くにある学校（重視する=1、しない=0）	−.013	.334	−.851 **	.221
他校より優秀である（重視する=1、しない=0）	−.203	.446	−.433	.311
卒業後の進学に有利（重視する=1、しない=0）	.766 *	.359	.534 *	.217
学校行事・ボランティア・PTAに参加（5~1）	−.133	.217	−.086	.115
教師に子どもの学力などの相談（5~1）	.107	.184	.229 *	.113
中学成績（5~1）	−.285	.151	−.553 **	.094
年収（基準：~450万円）	—	—	—	—
450~650万円	.697	.580	−.057	.264
650~950万円	.752	.555	.071	.277
950万円~	1.251 *	.583	.703 *	.299
母学歴（短・大卒=1、高・専卒=0）	.263	.349	.095	.207
−2LL	238.840		733.627	
Nagelkerke R^2	.087		.135	
N	272		1207	

** $p < 1\%$ * $p < 5\%$

さいごに、今後の検討課題を示しておこう。私立高校の学力的位置づけが低いと、私立高校を選択する子どもの母親は、教師を相談相手としていた。では、私立高校の学力的位置づけが高い地域の場合、母親は誰と相談するのであろうか。松岡（2019）は、都市規模によって中学生の通塾率に差があることを示している。本稿において、私立高校の学力的位置づけが高い地域の分析は、埼玉・千葉・東京に居住するサンプルを多く含んでいる。この分析モデルに対し、仮に「塾に子どもの学力などの相談」をあらわす変数を加えることができたなら、何らかの関連を示すのかもしれない。

図１の傾向と同じく、本稿の分析においても、公立より私立高校を選択する子どもは、高い教育アスピレーションを示した。しかし、私立高校の学力的位置づけが低い地域の場合、平均的に私立高校を選択する子どもの学業成績は、公立を選択する子どもよりも低い。こうした結果は、最終的な子どもの教育達成に、どのような傾向をもたらすのか疑問が残る。また、こうした疑問とも関連するが、ここで用いたデータは、2015 年時の中学３年生とその母親の情報である。そのため「高校の設置者」は、調査時点での希望でしかない。都道府県によって、各設置者の高校が生徒をどの程度受け入れるか等も踏まえれば、子どもが中３時に希望する高校へ必ず進学できるわけではないことは、十分考えられる。さらに、高卒後の高い教育アスピレーションをもっていたとしても、実際に、大学進学を果たせるとは限らない。こうしたことを明らかにするために、十分なサンプルサイズを保ったデータを収集し、今後も検討を続けていかなければならない。

〈付記〉

本研究は、JSPS 科研費（課題番号 19H01637）「中学時からの親子パネル調査を活用した格差・不平等に関する領域横断的研究」（代表者：藤原翔）による研究成果の一部である。また、本研究は、課題番号 18K13088 の助成を受けたものでもある。

〈注〉

1) もちろん、高い出身階層の生徒ほど高い学力にあり、それらが高校の学力ランクとも関連していることは、さまざまな研究で検討されてきた（藤原 2012 など）。

2) 学校基本調査をもとに、各都道府県の私立高校生徒率をみると、全国平均より一貫して高い生徒率を示すのは、東京、愛知、京都、大阪であり、これに次ぐのは福岡、神奈川、静岡、広島である。

3) Goldring ら（2008）も学校選択における利便性の一部として、家から学校の距離を検討に用いている。

4) のちのロジスティック回帰分析において、これら変数はすべて、1：重視する、0：重視しない、で用いる。

5) 具体的には「学校行事に出席・参加した」と「PTA や学級・学校ボランティアなどの保護者活動に参加した」を合算し、２で除したものである。この変数間の相関係数は r=.586 である。

6) 具体的には「自分から学校の担任やその他の教師と子の学力について話した」と「自分から学校の担任やその他の教師と子の学力以外（生活態度など）について話した」を合算し、２で除したものである。この変数間の相関係数は r=.847 である。

7) 教育に対する親の関与すべてが、学力や教育達成を高めるような正の関連にあるわけではない。Benner ら（2016）は、親の学校参加や子どもの将来の進路選択へのアドバイスが、学力や教育達成に正の関連となるものの、親が宿題を助けることは負の関連となることを示す。

8) これら母親の関与は、１：まったくしていなかった～５：いつもしていた、で用いる。

9) データにかんする詳しい情報は、藤原（2016）を参照されたい。

10) 近年、公立中学でも中高一貫校が存在し、附属高校へ進学するケースもあるが、本データでは特定できないため、考慮していない。

11) 各都道府県の高校の入試難易度（受験偏差値）は、「家庭教師のトライ」を参考にした。入試難易度は、学科（コース）ごとにつけられている（2016 年７月１日取得、http://www.trygroup.co.jp/exam/high/list/）。こうした情報から、入試難易度の高低を判断することにやや疑問は残るが、各都道府県の高校の序列構造において、私立高校がどのような位置づけとして中学生とその母親に認識されているかを判断するには、十分な情報といえる。

12) 公立高校に、国立も含めている。

13) 念のため、サンプルをわけずに、「私立高校の入試難易度ダミー（1：50 以上、0：50 未満）」と「家の近くにある学校」、「教師に子どもの学力などの相談」、「中学成績」との交互作用効果をそれぞれ確認したが、表１で示された結果と同じ傾向が示された。

〈参考文献〉

Benner, Aprile D., Alaina E. Boyle and Sydney Sadler, 2016, "Parental Involvement and Adolescents' Educational Success: The Role of Prior Achievement and Socioeconomic Status," *Journal of Youth and Adolescence*, 45（6）: 1053-64.

Coleman, James S. and Thomas Hoffer, 1987, *Public and Private High Schools: The Impact of Communities*, New York: Basic Book.

藤原翔，2012，「高校選択における相対的リスク回避仮説と学歴下降回避仮説の検証」『教育社会学研究』91: 29-49.

藤原翔，2016，「中学生と母親パネル調査の設計と標本特性」『東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクト　ディスカッションペーパーシリーズ』95，（2016 年８月１日取得，http://csrda.iss.u-tokyo.ac.jp/panel/dp/PanelDP_095Fujihara.pdf）.

藤田英典，1997，『教育改革』岩波新書.

Goldring, Ellen. B and Kristie J. R. Phillips, 2008, "Parent preferences and parent choices: the public-private decision about school choice," *Journal of Education Policy*, 23（3）: 209-30.

濱本真一，2015，「中学校選択の不平等――国私立中学校進学に関する階層差と地域差に着目して」『2014 年度参加者公募型二次分析研究会　子どもの生活　保護者の教育意識　研究成果報告書』東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター，217-30，（2016 年６月 12 日取得，http://csrda.iss.u-tokyo.ac.jp/rps/RPS053.pdf）.

香川めい・児玉英靖・相澤真一，2014，『＜高卒当然社会＞の戦後史――誰でも高校に通える社会は維持できるのか』新曜社.

片岡栄美，2009，「格差社会と小・中学受験――受験を通じた社会的閉鎖，リスク回避，異質な他者への寛容性」『家族社会学研究』21（1）: 30-44.

Lareau, Annette, 1987, "Social Class Differences in Family-School Relationships: The Importance of Cultural Capital," *Sociology of Education*, 60: 73-85.

Matsuoka, Ryoji, 2014, "An Empirical Investigation of Relationships between Junior High School Students' Family Socioeconomic Status, Parental Involvement, and Academic Performance in Japan,"『理論と方法』29（1）: 147-65.

松岡亮二，2019，『教育格差――階層・地域・学歴』ちくま書房.

中澤渉，2015，「進学希望意識はどこで育まれるのか――母子間における接触と意見の一致／不一致に着目して」中澤渉・藤原翔編『格差社会の中の高校生――家族・学校・進路選択』勁草書房，99-114.

西丸良一，2014，「高校の設置者種別と教育達成――私立高校の生徒の出身階層に注目して」『ソシオロジ』59（1）: 39-55.

西村幹子，2006，「ゆとり教育下における私立中学生の親の態度と行

動分析――教育費と学校選択に注目して」『大學教育研究』神戸大学, 14: 1-17.
竹ノ下弘久・裵智恵, 2013,「子どもの成績と親のサポート」渡辺秀樹・金鉉哲・松田茂樹・竹ノ下弘久編『勉強と居場所――学校と家族の日韓比較』勁草書房, 40-71.
Yang, Philip Q. and Nihan Kayaardi, 2004, "Who chooses non-public schools for their children?," *Educational Studie*, 30（3）: 231-49.

付表1：「私立高校の入試難易度50以上」で用いた独立変数間の相関

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
①性別（男=1、女=0）									
②都市規模（区=1、市町村=0）	-.027								
③家の近くにある学校（重視する=1、しない=0）	-.027	.150 *							
④他校より優秀である（重視する=1、しない=0）	.060	.076	-.011						
⑤卒業後の進学に有利（重視する=1、しない=0）	.011	.022	.003	.345 **					
⑥学校行事・ボランティア・PTAに参加（5~1）	.010	-.077	.002	.087	.108				
⑦教師に子どもの学力などの相談（5~1）	.065	-.013	.018	.032	.028	.415 **			
⑧中学成績（5~1）	.017	.044	.054	.459 **	.310 **	.086	-.089		
⑨年収（~450万円=0、450~650万円=1、650~950万円=2、950万円~=3）	.181 *	.125	.048	.153	.120	.124	.025	.135	
⑩母学歴（短・大卒=1、高・専卒=0）	-.044	.072	-.009	.226 **	.149 *	.177 **	.062	.167 **	.236 **

** $p < 1\%$ * $p < 5\%$

付表2：「私立高校の入試難易度50未満」で用いた独立変数間の相関

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
①性別（男=1、女=0）									
②都市規模（区=1、市町村=0）	-.024								
③家の近くにある学校（重視する=1、しない=0）	.026	.036							
④他校より優秀である（重視する=1、しない=0）	.048	.041	.015						
⑤卒業後の進学に有利（重視する=1、しない=0）	-.069 *	-.011	-.010	.340 **					
⑥学校行事・ボランティア・PTAに参加（5~1）	.035	.035	.024	.082	.095 **				
⑦教師に子どもの学力などの相談（5~1）	.064	.017	.044	.002	.012	.432 **			
⑧中学成績（5~1）	.014	.013	.036	.448 **	.349 **	.086 **	-.091 **		
⑨年収（~450万円=0、450~650万円=1、650~950万円=2、950万円~=3）	.016	.047	.045	.199 **	.134 **	.125 **	.062	.194 **	
⑩母学歴（短・大卒=1、高・専卒=0）	-.019	.069 *	-.026	.197 **	.142 **	.052	.006	.211 **	.238 **

** $p < 1\%$ * $p < 5\%$